

せなか

今泉 吉晴

せなかといえは、「おんぶ」という私たち人間独特の子どもの運搬方法が思い起されます。「おんぶ」は、ある程度手を自由に、他の仕事に使えて、しかも子どもを運べ、保護できるのですから、うまい方法だといえるでしょう。何しろ手の使用は、人間が人間であるための一つの基盤であって、それをうばわれては、私たちはほとんど仕事もできないのですから。

実は動物界広しといえども、私たち人間のように、子どもをおんぶできる動物は、ほかに一種類もありません。というところアラヤコモリネズミは背中に子どもをおぶっているのではないか、といわれるかもしれませんが、でも、これらの動物では、子どもが母親の背中に自分からしがみついているのであって、母親が積極的に何かをしているというのではないのです。私たち人間だけが背中に子どもをおんぶできる唯一の動物だといえます。

その理由は人間が直立二足歩行をするからだ、といえ

ば、たしかにそれは正しいのですが、もう少し具体的に考えてみると、そこには仲々興味深い秘密がかくされていることがわかります。

まず、おんぶするときの腕のまわし方を見てみましょう。肩の関節で、腕は後方に少しひかれ、ひじの関節で前腕が腰のやや上方にそえられます。そして手のひらで赤ちゃんの体が、下方からささえられています。それぞれの関節がいろいろな方向に曲げられ、その結果として手が背中にまわされていることがわかります。実はこのように複雑な腕の回転ができる動物は、サル類の一部をのぞけば、動物界には他に見あたらないのです。例えばイヌやウマを考えてみて下さい。彼らが後足で立てたとして、前足を背中にまわすことができるでしょうか。それはとても無理な相談です。

その理由はいろいろあるのですが、ここではもっとも大きな要因をあげておきましょう。彼らは私たちのように鎖

骨を持っていないからです。鎖骨という骨は、胸部の一番上にあつて、肩甲骨と胸骨とをつないでいる棒状の骨です。私たち人間の腕はこの鎖骨を支点にして、前後方向以外に左右にも上下にも、それこそありとあらゆる方向に動かせるというわけです。ウマやイヌなど、走ることに専門化した四肢を持つ動物では、肢は前後方向に動くことだけで十分で、不必要な鎖骨は退化してしまつたのです。

ところで鎖骨は私たちの背中の特徴もつくつています。人間の背中が広く平らだという特徴です。胸骨から左右に長くのびる鎖骨は広い肩幅をつくり、広くたいらな背中の筋肉（僧帽筋など）が、首から胸の下部までの背椎骨からのびて、この鎖骨と肩甲骨につくのです。この背中の筋肉は肩を動かし、腕に強い力を与えています。そして広い背中は、おんぶの安定した場にもなる、というわけです。

このようにユニークな人間の背中ですが、矛盾もあります。せなかの「無防備性」とでもいえる弱点は、その最たるものでしょう。私たちの目は二つ並んで顔の前面についている上に、背中が広いため、背中是完全な死角になります。背中は敵からの攻撃にもっとも弱い部分といえるでしょう。ちなみにウマなどでは、目が頭の左右にはなれてつ

き、頭部も高い位置にあることから、背中の方にも、その大部分を見ることができません。

ところで背中が無防備であるということ自体は必ずしも弱点になりません。サルたちも人間同様背後を見ることができませんが、群れ生活をおくる彼らは、仲間の目の助けを期待できます。仲間のたくさんの目が協力しあい、どんな動物よりも早く敵の接近を知ることができるのです。問題は私たち人間にとって敵とは何か、というところにあります。

動物にとっての敵は必ず他種の動物——例えばウマにとつてならオオカミやライオンなどの肉食獣——であつて、同種の仲間ではないのです。悲しいことに人間という動物だけは、最大の敵が同じ仲間の人間です。本来助けあい、背後からの敵の接近を知らせてくれるはずの仲間が敵になるのです。そこで、せなかはおもつとも無防備な部分としてねらわれます。私たちは背後からの攻撃はひきょうだ、などといったあまりあてにならない「モラル」を発達させました。人間にとつて人間が敵という最大の矛盾は解決されてはいません。背中はいろいろな意味で、人間の人間的特質を背おつているといえるでしょう。（動物学者）